

『今昔物語』巻十二の本文の位置づけ

中 根 千 絵

て、彦根城博物館所蔵『今昔物語』（全巻、表紙の題は『今昔物語』と書いてあるが、内題には『今昔物語集』とある。）の紹介を行ったが、その際、本の空白部分の分析、流布本系共通脱文の分析から、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、内閣文庫本Bに近い流布本系の本であり、内閣文庫本Bより良い本であろうと論じた^①。しかし、その位置づけが正しいかどうかは、諸本との一語一語の比較を経て、初めて、立証されるものである。

巻一については、先に論集で分析を行い、彦根城博物館本は内閣文庫本Bとのみ一致する箇所が多く、これは、『説林』五三号で論じたのと同じ傾向であるが、旧日本古典文学大系の底本である東大本甲や東北大本、野村本とのみ一致する箇所もあり、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、流布本系諸本（内閣文庫本ABC、東大本乙）と古本系諸本（東大本甲、東北大本、野村本）の間の状態を有する希有な本であるということを述べた^②。巻二の場合は、鈴鹿本という原本に近い本が残っているせい^③か、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、野村本と一致する箇所は非常に少ないという結果が得られた。巻三では、特に、野村本が流布本系と古本系との狭間で揺れている様を見てとることができた。また、様々な要件から、流布本系は、校訂本文を目指した書物群ではなかったかと推測した。但し、彦根本のように、中間的な表記を有する書物の場合には、いまだ、そのどちらとも見定めがたいとし、今後、さらに、巻ごとの分析を続

け、彦根本の性格を見極めると共に、古態本と流布本の総合的な分析を行っていきたくとした。⁽⁴⁾ 巻四の場合に顕著な傾向として現れるのは、古本系との一致度が高く、内閣文庫本Bとの一致度は低いということである。これまで、彦根城博物館本は古態本と流布本の中間的な本として位置づけてきたが、巻四にいたって、古態本の表記を有することが判明したことにより、改めて、彦根本の位置づけを考えてみなければならぬこととなった。⁽⁵⁾ 巻五の場合は、内閣文庫本Bとの一致度は他の流布本と同じ程度である。巻五、巻七、巻九では、巻二と同じく、鈴鹿本という原本に近い本が残っているせいも、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、野村本と一致する箇所は非常に少ないという結果が得られた。但し、巻五、巻七では全体として、流布本系の諸本と表記が一致するにも関わらず、固有名詞等については、古本系諸本に依っており、これは巻四と同じである。⁽⁶⁾ 巻六・巻十については、巻三と同様の結果が得られた。⁽⁷⁾ 巻十一の場合、鈴鹿本が残存しない巻のせいも、彦根城博物館所蔵『今昔物語』と流布本系諸本の東大本乙と内閣文庫本Bとの一致度が高い。ただし、内閣文庫本Bにおいて、出典等による補入がある部分については、その表現は一致しない。こうしたことから、彦根城博物館本は、内閣文庫本Bより前に成立した写本である可能性が高いと考えた。⁽⁸⁾ 巻十二についても引き続き、彦根城博物館所蔵『今昔物語』の本文を他の諸本と比較することにより、彦根博物館所蔵『今昔物語』巻十一の位置づけを試みることにしたい。但し、諸本の収集は、いまだ、その途上にあり、旧日本古典文学大系『今昔物語集』の校異と頭注から必要な部分を抜き出す形で、諸本との比較を行うこととする。

彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻十二の本文異同

凡例

一番上の段は旧日本古典文学大系のページと行、次の段は彦根城博物館所蔵本の本文、次の段は彦根城博物館所蔵本と同じ本文を持つ本の種類である。(但し、異体字などの字形が異なるものについてはこれに含め、その都度指摘し

た。) ★印は彦根城博物館所蔵本独自の部分であり、その部分については諸本の例を示した。旧日本古典文学大系に載る考察は必要に応じて「」に入れて付した。

各本の略語は次の通りである。

底―旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本（鈴鹿本（京大本））【旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本が現在の諸本のうちの古態本にあたると思われることから、底の字を使うことで、それが一見して明らかとなるようにした。】 甲―東大本甲 北―東北大本 実―実践女子大本 国―國學院大本 野―野村本 以上、古本 乙―東大本乙 A―内閣文庫本 A B―内閣文庫本 B C―内閣文庫本 C 以上流布本 鈴鹿本（京大本）を除く諸本―諸彦―彦根城博物館所蔵本 大―旧日本古典文学大系

巻十二の底本は鈴鹿本

巻十二目録

- | | | |
|-----|-----------|---------------------------|
| 一二九 | 縛雷起（第一） | 〔縛雷起〕底野 A B C |
| | 銅像（第十三） | 乙 A B C |
| | 佛従身（第十九） | 底甲北実国野乙 |
| | 第二十（第二十） | 野 A B C |
| | 第廿二（第二二） | 底野 A B C |
| | 成法華経（第二七） | 底甲北国実野乙（甲の花経は変、底甲北国実野乙は花） |

卷十二第二話

一三〇 5 持テ

9 即チ改テ

10 前ノ如ク

10 此度ハ

11 聖テ

16 随タリ

一三二 1 起臥シ

3 度々

9 不令ト去シ

11 間ニ

13 甌斐フ

16 諸ノ

★ 「受ケ持テ」底甲北実国野大「受テ持テ」乙ABC

C

諸（底破損のため「前ノ」不明）

★ 「此ノ度ヒ」底甲北実国野大「此ノ度ニ」乙ABC

甲北実国乙AC

諸（底は加筆して墮と訂す、野は随十土に作る）

★ 「起キ臥シ」底北実国野B「起テ臥シ」甲乙AC

野乙ABC

乙A

北実国野乙ABC

乙A

乙ABC

卷十二第二話

一三二 6 □ノ郷ニ

9 不慮ル程

9 懐妊シヌ

12 恠ム事

14 其児

諸大

乙ABC

ABC

野乙ABC

北B

17	舍利ヲ見セテ手ノ捲 タル	B C
一三三三 4	幾程ヲ	乙 A B C
4	止	実国野乙 A B C
4	此ノ願ヲ	諸「此レ願ヲ」底大
5	佛ノ	大「このノは主格。これを理解する能わざりし」甲・北二本は「仏テ」に作る。
5	供養ノ後	乙 A B C
5	隠レ給ヒヌトナム	乙 A B
卷十二第三話		
一三三三 16	家ニメ	底乙 A B C (底は行末、底Cはシテ)
一三四二 2	大織冠宣ク	★「大織冠ノ宣ハク」底甲北実国野大「大織冠宣ハク」A B C「大織冠ハク」乙
7	傳ナト	乙 A B C
8	時	諸
8	手ニ	諸大 諸本かく作るが、三宝絵は「身」とする。
8	崇占ニ	「崇占フニ大(破損のため、底本の字体不明)」「崇」は古写本においては「崇」と普通に通用する。」
9	講スル事發メ	甲北実国野乙 A C (甲北実国野乙 A C は裁シテ)
11	南山階ト寺云ヘリ	乙
15	儀式巖重サヨリ	甲北実国野乙 A

卷十二第四話

16 衆ニ 諸「室ニ」底大
 17 不所学ス 北「不学ス」B「不□所学ス」甲実国野乙AC「不似所学ス」底大

一三五 8 十四日ニ 野乙ABC「十四ニ」底甲北実国

9 限り 乙ABC

10 山階ノ 乙ABC

10 聴衆 乙ABC「廳衆」底甲北実国野大

流布本の「聴衆」が正字。

12 佛説給ヘル B C

13 心ニ 乙ABC

14 廣ク國ヲ護ラムカ B「廣ク□マシテ國ヲ□護ラムカ」底大（破損のため不明）「廣ク□國ヲ□護ラムカ」甲北実国野乙「廣ク□國ヲ護ラムカ」AC

16 國分寺ニメ 乙ABC（乙ABCはシテ）

16 同シ時ヲ 乙AC

16 行フ 「此レヲ行フ」底大

「古本「此」を脱シ、流布本「此レ」を欠く。」

卷十二第五話

一三六 6 淳和天皇

AC

卷十二第六話

一三七七 草木皆其ヲ知テ

7 心ニ悟リ有テ

7 達レハ

9 令榮

10 帝王ノ後ノ人ヲ

11 行フ

11 摩

11 摩御齊ニ會ノ

14 御寺ノ子

17 維摩會

17 是ニ

17 過キ

一三七一 已講ト云官

1 位ヲ被

2 濠會

2 會也トナム

諸

諸

乙ABC

ABC

諸

「維摩」大「古本、及び乙本、すべて「維」を脱するがABC三本によりて訂

底甲北実国野乙

諸大「寺」は「等」の省文。上の「御」は「方」の意の敬称と見られる。

乙ABC

★「此レニ」国乙ABC大「此レニハ」底甲北実野

「過ズ」大

B 乙は脱

B「僧綱ノ位ヲ被授ル」底大（破損のため不明）「□位ヲ被□」甲北実国野「位

ヲ被□」乙A「脱文」被□」C

甲実国乙A（甲実国乙Aは会

底乙AC

★「草木ソラ皆其ノ知テ」底甲北実国野大「草木ソ皆其ヲ知テ」乙AC「草木モ皆其ヲ知テ」B

- | | | |
|-----|----------|---|
| 17 | 有ラムト | 乙 A B C |
| 16 | 微妙ニシテ | 乙 A B C |
| 13 | 来レル | 乙 A B C |
| 13 | 否ヤト | 乙 A B C |
| 10 | 生シ事 | ★ 「生シム事ヲ」底甲実国野「生シム事」北「生レム事」乙 A C 大「生ム事」 B |
| 7 | 法花経□書寫シテ | 底甲北実国野乙 A C 大（底は破損のため不明、諸本空白）「法華経□寫シテ」野
「法花経写シテ」 B |
| 6 | 非□年 | 諸 Bは空白なし |
| 6 | 疑不有シ思ヒ | 乙 A B C |
| 6 | 聴聞ノ事 | 実国野「聴聞ノ事」 B
乙 A C（乙 A Cはシテ）「聴聞□□」底大（破損のため不明）「聴聞シテ□事」甲北 |
| 5 | 隙 | 「隙ニ底大「隙」諸（実国以外は隙）」
乙 A C |
| 一三八 | 男ノ中ハ | ★ 「汝ハ此本」底甲北実国野「汝ハ本」乙「本」 A B C |
| 17 | 汝チハ本 | 乙 A B C |
| 15 | 人皆 | 諸「本意」底大
乙 A B C |
| 13 | 大意 | 諸大 |
| 12 | 善殊 | 諸大 |
| 8 | 報シ不奉シヤト | B |

卷十二第七話

一三九 4 其ヲ講師トシテ

甲北実国乙ABC

10 法服ヲ

底AC

11 講師トセント

★ 「讀トセムト」乙「講師トセムト」甲北実国野ABC 「講師トセムト為ルニ底大

11 然ハ

★ 「然レハ」諸「我レハ」底大

「底本、破損のため不明なる故、諸本「然」に作る。」

11 其ノ器ニ非ス

底乙AC

11 請ヲ行ヲ

甲北実国乙

12 持行以テ

B 「持行テ□ヲ以テ」底大（破損のため不明）「持行□以テ」甲北実国野乙AC

12 世ヲ過ス

乙ABC

12 者ナリ

★ 「者也」底「者也□」甲北実国野「者也」乙ABC

12 其時云

B

14 畢タレハ

乙ABC

一四〇 2 不闕サ

乙ABC

4 礼シ可奉シ

野AC

卷十二第八話

一四〇 12 夜

乙ABC

15 死スル

北ABC

卷十二第九話

一四二 4 云々

乙ABC

7 □年ノ月□日

「□年ノ□月□日」大 諸本欠字。

8 微妙ノ

乙ABC

10 座主□

諸大

10 礼マセ給メ事

乙

11 無限リ□年ノ

「无限シ□年ノ」大 諸本欠字。

12 四月日ニ

ABC 「四月□日ニ」底甲北実国野乙大

14 微妙シ

底甲北実国野

15 朱雀ヲ登リ

乙ABC

16 無隙ニ

乙ABC (乙ABCは無)

17 値ヘテ

底甲北実国乙大「植ヘテ」野A「植テ」B「植ヘ」C

一四二 1 諛シ

「古本及び乙本かく作るが、このままでは意不通。「殖」の変か。」
諸(甲以下の諛は変、旁を甲は古十心、北実国野は十口十心、彦乙ABは草冠に日十心に作る)

2 内々ニモ

乙ABC

卷十二第十話

一四二 6 帝王ニ御シケル

乙ABC

6 夷□軍ヲ

「夷□ムカ□軍ヲ」底大 諸本欠字。

	7	給□ケル	「給ヒケル□カ□」底大「給ヒケル□諸
			諸本欠字。
	9	然レハ公モ	諸
	9	御託宣ニ依テ	諸
	10	放生ノ祈ヲ	底AC (Cは料)
	11	八月十五日ヲ	北野B「八月十五日」底甲実国乙AC大
	15	行フ	乙ABC
	16	仕ル	乙ABC
	16	僧威儀ヲ	乙ABC
	一四三	候シケルニ	乙ABC
	4	礼拝シ奉リケルニ	乙ABC「礼拝シテ奉リケルニ」底甲北実国野大
	6	宮ヨリ皇ニテ	諸
	8	□下マテ	北乙ABC「□下ニテ」甲実国野「□ラセ給□行教下ニテ」底大(破損のため不明)
	9	常□	甲北実国野乙AC「常」B「常ニ参ツ、」底大
	11	遷ラセ給ヌル	乙ABC
	12	御マシニ依テ	諸
	15	面申承ハリ給ニケレハ乙ABC	

卷十二第十一話

一四四 5 □ノ

諸大

7 枇花

諸大「桃花」北BC

7 橋ノ木ニ

乙ABC

10 渡リ行クニ

★「渡テ行クニ」底大「渡行クニ」諸

12 不造畢ル

乙ABC

12 曳テ渡セル

乙ABC

16 像造リ奉リツ

★「像ヲ作り奉リツ」ABC「像□奉リツ」甲北実国野乙「像□造奉リツ」底大（破損のため不明）

17 安在シテ

甲北実国野乙AC

一四五 1 不此心無

★「不此心无」甲実国野乙ABC「不此レ心无シ」北「木ハ此レ心无シ」底大

8 音ヲ出サムヤ

底ABC

卷十二第十二話

一四五 6 國ト堺

諸「諸本かく作るがトノの意。」

12 木像

諸「木像ヲ」底大

16 道場ヲ造テ

底北B

一四六 1 薬師佛

★「薬師佛ノ」底甲北実国野乙大「薬師ノ」ABC

3 可礼奉キ也ト

★「可礼奉キ佛也ト」乙ABC「可礼奉キ也トナム」底甲北実国野大

卷十二第十三話

- 一四六 7 □根ノ郡ノ
- 7 盗人有リ
- 17 伺ヒ見ルニ
- 17 ノソケハ
- 一四七 1 剔 缺キ
- 1 錠ヲ
- 2 此レヲ聞テ
- 3 問フニ云ク
- 8 荘テ
- 9 弃ツ
- 9 相具シ□上ニ
- 10 紀シ問フニ
- 10 聞入
- 11 盗人重罪ヲ
- 12 痛ミ給フ
- 13 不思議ノ

甲実国野乙A

諸大 「底本破損のため不明。諸本により補いたるも、或は「ケリ」とあつたものか。」

★ 「伺ヒ見セシムルニ」乙ABC 「伺ヒ令見ルニ」底甲北実国野大

乙ABC

諸大 「諸本かく作るが靈異記は「剔」

諸大 「諸本かく作るが、この字、古字書に見えず。或は、靈異記に見える「錠」の

変か。錠は、靈異記の訓釈にタガネとよみ、名義抄同訓。」

乙ABC

乙AC

「荘」古本大

底野乙ABC

★ 「相具シ□上テ」諸「相具シテ京ニ将上テ」底大

乙

甲北実国乙AB

乙ABC

★ 「叫ヒ給フ」甲北実国乙ABC 「叫給フ」野「痛ミ叫ビ給フ」底大

乙ABC (乙ACは議)

卷十二第十四話

一四八 1 綱ヲ

A B C

2 一人ヲ

諸

3 此ノニ

乙 A B C

4 役トシ

諸

14 〇人

甲北実国野 A C

15 共〇人ノ始クシテ

乙 A C

一四九 3 其国ノトメ

乙 A B C (乙 A B C はシテ)

4 〇ト云人

諸大

6 寺ニ行テ

乙 A B C

8 何トシテ活テ

実国乙 A B

15 利益可有キ也

乙 A B C

卷十二第十五話

一五〇 3 〇貧クシテ

諸

3 食ニ

諸

5 少知ル事

★ 「少知コト」 甲北実国野乙 A C (甲のコは変) 「少知フト」 B 「少〇智リ」 底大

(破損のため不明)

5 我レ聞〇大安寺ノ

甲北実国乙 A B C

10 福ヲ願テ

乙 A B C

一五二 16 庭ノ中ニ四貫
1 2 開キ見レハ

乙ABC 野は脱
野乙ABC

7 是ヲ本トシテ

★「此ヲ本トシテ」諸「此ヲ以ニ本トシテ」底大

7 財ニ富メリ

乙ABC

8 奇異□世ノ人

諸「奇異不可云□然□」底(破損のため かな不明)

9 首ヲ仰テ

諸

卷十二第十六話

一五二 15 群臣ト

底野乙BC

16 細見ノ里ノ

乙ABC 「網見ノ里ノ」底甲実国大「網見ノ里ノ」北「網見ノ里ノ百ノ」野

17 致テ敢ツ

乙A「致シテ敢ツ」底北実国大「致敢ツ」甲「殺シテ救シツ」野「殺テ取ツ」B「殺シテ放ツ」C

「噉」の省文であろう。野・B・Cの三本は之を解し得ず、それぞれ「救」「取」「放」に作る。

一五二 1 敢ヘル

甲乙A (甲の敢は変)

3 我レ

乙ABC

4 令詣テ

AC

4 誦経ヲ行フ

底乙AC

5 我等カ刑罰ヲ

底野乙

5 鐘テ

甲北実国野A

7 鐘ヲ挿キ
9 此者ニ

甲北実野乙
A C

卷十二第十七話

一五二 17 □ 郡ノ

諸「平郡ノ」底大 正字は「平群」

17 住セル

野乙 A B C 「住シテ」底大「住シノ」甲北実国

17 四 □ □ 為ニ

諸（Bは四を皿に作る）「罪過ヲ□為ニ」底大（破損のため不明）

17 □ 佛ノ像ヲ

諸大

一五三 1 □ 安置シテ

★「暫ク」底甲北実国野大「暫ニ」乙 B 「暫シ」A C

2 暫々

「不詣ザル」大

2 不詣ル

「不詣ザル」大

10 事ヲ問テ

諸「此ノ事ヲ問テ」底大

11 迹ヌル也ケリト

諸

17 其ノ邊ノ

甲実国乙 A C

17 首ヲ仰キ

乙 A B C（乙の仰は変）

卷十二第十八話

一五四 4 八多ト云寺

乙 A B C

4 繪像□在マス

甲北実国野乙 A（Aの像は僧）

6 寔ニメ

「寔ニシテ」底乙大「寡ニシテ」甲北実国 A B C 「宴ニシテ」野（乙 A B のシテ合

字、甲北実国も稟に作る)

諸

実国野乙 A C

- 7 供養セムト為
- 9 火ヲ放チ

巻十二第十九話

- 一五五 4 生タリ

乙 A C

- 5 或時

★ 「或ル時ニハ」底甲北実国野大「或ル時ニ」乙 A C 「或時ニ」 B 「ハは強調の用法と見られる。」

- 8 蓼原ノ堂ニ

A B C

- 9 □ヲ開テ

甲北実国乙 A B C

- 9 佛ヲ奉礼拝テ

A B C

- 10 一度モ

乙 A B C

- 一五六 3 受クラム人

甲北実国乙 A B C

巻十二第二十話

- 一五六 6 □ト云年ノ

諸大

- 7 月日

大 「諸本欠字なきも空格を存したものであろう。」

- 7 講堂金堂ノ南ニ

乙 A B C

- 11 煙リ

「煙」大 「古本特有の字体。」

- 11 火食堂ニテ皆焼畢ヌ

底甲北実国野

- 11 暎畢ル
「暎」大 「古本特有の字体。」
- 11 三節
「節」諸 「三筋」大
「諸本の字体は「節」に非ずんば「節」。」
- 12 夜曙ヌレハ
野ABC 「夜曙ヌレハ」底甲実大 「夜曙ヌレハ」北乙
「この字体は、「暎」と「曙」との混淆に基づくものであろう。」
- 17 鐘樓
「鐘樓」底大 「底本のこの字体は「鐘」の異体字。」
- 一五七二 落ヌ
野BC
- 4 編入ノ材木ヲ
乙ABC
- 8 南大門ノ
乙ABC
- 8 祈請ス
底野乙ABC
- 9 面ノ堀河
諸
- 10 泉阿ノ津運テ
乙
- 10 河ヨリ
諸
- 14 夫ヲ催テ
底乙ABC
- 14 上ニ□来テ
諸「上ニ鳩□現ニ来テ」底大（破損のため かな一字分不明）「ゾとあったものか。」
- 15 在ナムトソ□守ノ
「有ナムトソ□守ノ」諸大（底は破損のため不明、他本空白）「有トナムトソ□守ノ」B
- 15 死ヌレハ
甲実国乙AC
- 15 罰シ給ヒツルナリ
★ 「罰シ給ヒツル也」乙ABC 「罰シ給ヒツル也トゾ」底甲北実国野大
- 17 此金堂ニハ
★ 「此ノ金堂ニハ」乙ABC 「此ノ寺ノ金堂ニハ」底甲北実国野大

卷十二第二十一話

17 只

底乙ABC

一五八11 永承元年ト云

乙ABC

14 流シ入レテ

★ 「流シ入レツ」底大「流シ入レツト」諸

16 各大小ノ房

乙ABC

一五九1 行事

乙ABC

2 夫共寄テ

★ 「夫共此□寄テ」底大（破損のため不明）「夫、共 寄テ」甲米国「夫共□寄テ」北「夫无共寄テ」野「夫□寄テ」乙「夫トモ寄テ」ABC

3 恠ミ少シ許

★ 「恠ミ少シ許」BC（Cの許は計）「恠□許」甲北米国野乙「恠ムテ□尺許」底大（破損のため不明）

4 深サ尺許

乙ABC

7 層ヲ造リ覆テ

「層ヲ造リ覆テ」北野乙ABC

8 云フ年

諸

16 横様ニ尺九寸ノ

底甲北米国野

17 柱ヲ可結シ

甲米国野乙

一六〇2 間ノ間長

★ 「其ノ中ノ間ノ間長」底甲北米国野大「其ノ間ノ長」乙「其ノ間ノ間長」AC

3 三丈ナル□

「其間ノ間長」B
諸「三丈ナルヲ三支上ゲニキ」底大

4 □其木

★ 「定メテ其ノ木」底大「□其ノ木」甲北米国野乙AC「其木」B

4 梁上□□但シ

北乙AC

6 不可置ト

乙ABC

7 是ハ

「此レハ」諸大 「B本ハを欠く。」

8 成タルトモ

★ 「成タルトモ」乙ABC 「成ニタレトモ」底甲北実国野大

9 礼ミ仰キ奉ルトナリ

★ 「礼ミ仰ギ奉ルナメリ」底乙AC大 「礼ミ仰テ奉ルナメリ」甲北実国 「礼ミ仰キ奉ナメリ」B

卷十二第二十二話

一六〇14 寛□二年ト

★ 「寛仁二年ト」底甲北実国大 「寛仁三年ト」野 「寛仁年ト」乙ABC

15 □年

諸大

15 月日

乙ABC 「月□日」底甲北実国野大

17 □阿闍梨

諸大

一六一3 幄ヲ

乙AC 「握ヲ」底甲北実国野大 (甲北は木偏に作る) 「幄ヲヲ」B 「古本かく作るが正字は「幄」

3 大鼓鉦

乙AC

4 各二ツ

諸

5 大内ノ外ニ

諸 「大門ノ外ニ」大

6 僧上リ立テ

乙AC

7 此ケリ

乙

	8	□系
	8	諸大 底本破損のため不明。
	8	諸「大鼓ノ疋□」底大(底本破損のため不明)
	10	見ケレハ下ニ
	10	上ツ方ニ
	10	居タルハ
	10	誰
	12	着ス
	13	答テ
	14	然ハ
15	15	皆々
15	15	唳リケリ

卷十二第二十三話

一六二六 堂ニシテ

6 年ノ月日ニ

6 例ヲ

10 失ニキ

- 諸大 底本破損のため不明。
- 諸「大鼓ノ疋□」底大(底本破損のため不明)
- 諸
- 北野乙ABC
- 乙ABC
- 乙ABC
- 乙ABC
- 乙ABC
- ★ 「然レハ」乙ABC 「然レドハ」底甲北実国野大
- 「古本かく作るのは、「然レドモ」と一旦いった(もしくは書いた)後に「然レバ」と訂した。その推敲の過程を如実に示すものである。」
- 「皆」大
- ★ 「云ヒ唳リケリ」乙ABC 「云ヒ唳リケル」底甲北実国野大
- 甲北実国野大乙B
- 乙ABC 「□年ノ月□日」底大 「年ノ」甲北実国野
- 甲乙ABC 「例時ヲ」底実国野大 「時ヲ」北
- 「諸本、この語を理解し得ざりし為か、「例」か「時」に作る。」
- 底BC

10 見タルヲ

野「見タル」B「見タルテ」諸
諸本かく作るが、意不通。

11 事ニナムト仰セ給ヒ

乙ABC

ケル

12 其光ノ

B

12 見□程ハ

甲実国野乙ABC「見□程□」北「見シ程ハ」底大

12 如クニソ在ル

★「如クニゾ有ケル」底大「如クニソ有ル」甲北実国野乙BC「如ニソ有ル」A

13 奇異也トソ

乙ABC

13 云ケルトナム

底野ABC

卷十二第二十四話

一六二 越中守ニ

乙ABC

一六三 國ヨリ

乙ABC

1 一頭得タリ

北乙ABC

3 然ル間

★「而ウ間」底大「而ヲ間」甲北実国「而ル間」野乙ABC

「底本「ウ」、古本「ヲ」に作るのは、ルの古体「・」が、ヲの古体「・」と見誤れた
為の変化と思われる。」

3 持テ

底甲実国野

5 前ノ大僧ニテ

★「前ノ大僧正ノ僧都ニテ夢ニ」底大「前ノ大僧正ニテ夢ニ」甲北実国野「前大僧
マテ夢ニ」乙「前大僧正マテ夢」C「前大僧正マテ夢ニ」AB

9	7	5	3	一六五	17	15	13	6		6	1	一六四	15	10	9
壊ル	香可有キニ	来レル	臥テハ	成ル程	者共	聞キ繼キ	云ト見テ	迹去ヌ		泰ヲ	希有ノ事也ト	三廻廻ル	心敬貴テ	平タル	行キ

「明尊前の大僧正がまだ僧都であった頃のことであるが、の意。この関係が理解できなかつた為に、諸本、本文が乱れた。」

乙ABC

★ 「平ニタル」乙AC 「平シタル」B 「平ミタル」底甲北実国野大

ABC 「心敬ヒ貴テ」野 「止敬貴テ」乙 「止敬ヒ貴テ」底甲北実国大

「流布本は理解する能わざるため「心」に作る。」

甲北実国ABC

乙ABC

「泰ヲ」底甲北大「泰ノ」実国野「泰ヲ」AC「泰ヲ」

B 「茨の下、諸本、大概「示」に作るが、(A・Cは「水」、Bは「糸」、正しくは

「木」

B

乙AB

ABC

諸

乙ABC

諸

ABC

甲北実国野乙AC

乙ABC

一六五 12 不乱セ無シ

★ 「不礼ヲ无シ」底甲北実国野大「不礼セ无シ」B 「不乱セ无シ」乙A 「不乱不乱セ無シ」C

14 至要共也ト

乙AC

15 □ト云テ

諸大

16 此□□聖人

「此ノ□□聖人」大 諸本欠字。

一六六 2 佛ニ□□不押畢

諸

3 此取リスニ

★ 「此ノ取リスニ」乙A 「此ノ取リニ」B 「此ノ取リナスニ」C 「此レヲ取リ集メ

4 法會ヲ行ヒ

乙AC

5 不乱奉ル事

乙

5 一度

諸

6 功德ノ

乙AC

卷十二第二十五話

一六六 11 云フ者在リ

★ 「云フ者有ケリ」底甲北実国野大「云フ者□ケリ」乙「云フ者アリ」AC 「云者アリ」B

16 是必ス

★ 「此レ値ニ必ズ」底大「此レ□必ス」甲北実国野「此レ必ス」乙ABC

17 是ヲ

「此レヲ」大

一六七 1 嘲テ

乙ABC 「此レヲ嘲テ」甲北実国野「此レヲ嘲テ寄テ」底大

4 依テソ

AC

5 我モ智無シ

★ 「我レ少モ智無シ」底大 「我レ□モ智無シ」甲北実国野 「我□モ智無シ」乙A C
「我モ智無シ」B

6 命ヲ繼ク

底B大 「□ヲ繼ク」甲実国野 「命ヲ繼テ」北 「□繼テ」乙 「ヲ繼ク」A 「繼ク」C

6 □更ニ

甲北実国野乙A C 「我レ更ニ」底大

6 思我

甲北実国野

10 用タリシニ

★ 「用シタリシニ」底甲北実国大 「用ヒタリシニ」乙A B C

11 其債ヒ償フ也

★ 「其ノ債ヲ償フ也」底大 「其ノ債ニ償フ也」甲北実国野 (北のフは変) 「其ノ債ヒ償フ也」C

13 我座ニ

A B C

一六八 3 桴ノ為ニ

諸 (乙Bの桴は立心偏、野は桴に作る)

5 靈驗ヲ示ス也ト

野乙A B C

5 積シ驗シ也

★ 「積シ驗也ト」乙A B C 「積メル驗也ト」底甲北実国野大

7 牛馬ノ大等ノ

甲北実国野乙A

卷十二第二十六話

一六八 12 願ヲ發シ

B (Bは發)

12 報セムカ為ニ

底

16 経ヲ入奉ル

B

17 此□錯ヲ

★ 「此ノ□錯ヲ」甲北実国野乙A C 「此ノ失錯ヲ」底大 「此ノ錯ヲ」B

一六九 1 自然シテ

「自然ラ」大

卷十二第二十七話

- 1 不足
- 2 會メ
- 3 筥へ奉ル
- 4 等カシ
- 5 童子楯
- 6 經ニ非ス
- 7 恐レ怖ムテ
- 8 道ヲスルニ
- 9 非ス
- 10 疲レカ弱クシテ
- 11 無リケリ
- 12 令愈
- 13 我レ
- 14 一童ノ遣テ
- 15 積ニ

乙 A B C

★ 「筥ニ入レ奉ルニ」底甲北実国野大（筥は異体）「筥ニ入レ奉ル」乙「筥ニ入奉ル」B 「筥入奉ル」A C

甲北実国野乙

諸

「非ラズ」底大「非フステ」甲北実国「非ラスシテ」野「非ステ」乙「非シテ」A C

「非スシテ」B

乙 A C

乙 A B C

★ 「无カナリ」底甲北実国野大「无カナト」野「无カリケリ」A B C

★ 「我レ魚ヲ」底甲北実国野大「我ヲ」乙「我ヲ」A B C

★ 「一ノ童ヲ遣テ」底B大「一ノ□遣テ」北実国野乙A大「一ノ遣テ」C

諸大 旁を野村本「置」A B両本「遣」、C本「置」に従うのは、異体字の名残を止めるものあろう。

乙 A B C (乙 A B C はシテ)

★ 「童尚」底甲北実国野大「童子尚」乙 A B C

乙 A B C

諸大 「恐レ怖ムテ」の譌。

- | | | |
|----------|-----------|--|
| 11 | 見顯ナムト | 北ABC |
| 16 | 是ヨリ後 | ★「此ヨリ後」野乙ABC「此ヨリ後ハ」底甲実国大（甲のハは朱筆）「此ヨリ後
ニ」北 |
| 一七一 | 1 是寄異ノ事也 | ★「此レ奇異ノ事也」底野乙ABC大「此ノ奇異ノ事也」甲北実国 |
| 2 | 2 食スト云フトモ | 北乙ABC |
| 4 | 4 魚忽化メ | 乙ABC（乙ABCはシテ） |
| 卷十二第二十八話 | | |
| 一七一 | 8 一人ノ書生 | 底実国野 |
| 8 | 在リ | ★「有リ」乙ABC「有ケリ」底甲北実国野大 |
| 12 | 出ム事ヲ | 乙ABC |
| 13 | 成ニケル事ト | 乙ABC |
| 13 | 喜テ忿キ | 乙ABC（BCの忿は急） |
| 16 | 立給ヘシ | 実国野ABC |
| 一七二 | 2 何ニシテ | 乙ABC |
| 3 | 怖シト云モ愚也ト | AC「怖シト云ヘバ愚也ヤ」底大「怖シト□愚也ト」甲北実国野「□怖シト□愚
也ト」乙「怖シト云モ愚也」B |
| 5 | 5 □打 | 「切□打テ」底大（破損のため不明）「□打テ」甲北実国野「□打ニ」乙ABC |
| 5 | 5 迚ル□リ倒ヌ | ★「迚ル□走リ倒レヌ」底大（破損のため不明）大「迚ル□リ例ヌ」諸 |
| 6 | 6 思□ | 甲北実国野乙AC |

- | | | |
|----------|-----------|---|
| 16 | 不可疑スナム | 乙 |
| 16 | 書寫タラハ | 乙 A B C |
| 15 | 誠ノ心ヲ | 大 「このヲはヲ以テの意であろう。やや落ち着かぬ語法なので、北本はヲの下に挿入符を加え、B本は「以テ歟」と朱補。」 |
| 8 | 佛ヲ念シ奉リ | 底野乙 A B C |
| 8 | 家ニ可至シ | 乙 A B C |
| 8 | 是ヲ出テ | ★ 「此ヲ出テ」乙 A B C 「此ヲ出ニハ」甲北実国野 「此ヲ出デ、」底大 |
| 7 | 被噉ムトスル人 | A B C |
| 一七三
6 | 妙ノ口ト云フハ | 甲北実国野乙 A C |
| 14 | 噉ナムト為ルニコソ | ソ」底甲北実国大
★ 「噉ナム為ルニコソ」乙 A B C 「噉ラハムト為ルニコソ」野 「噉テムト為ルニコ |
| 13 | 噉ヒツル | 底乙 A C |
| 11 | 聞クハ | 乙 A C |
| 9 | 不知ヤ | 乙 A B C |
| 8 | 聞ニ | ★ 「聞クニモ」底甲実国大 「聞クニ」北野乙 A B C |
| 8 | 噉ヌ | 乙 A B |
| 7 | 此有リフル | 乙 A C |
| 7 | 何ソ | 乙 A B C |

卷十二第二十九話

一七四 5 是ニ依テ

★ 「此レニ依テ」底野乙ABC大「此レハ依テ」甲実国

6 営テ

乙ABC

7 養フ許ヲ巧ム

乙AB

9 身ヲ清メテ

乙ABC

13 其家

B 「其ノ家ニ」底大「其ノ家」甲北実国野乙AC

14 経□□ヲ

A 「経ヲ」B 「経□□ヲモ」甲北実国野乙C 「経筥ヲモ」底大（筥は異体）

16 焼ケ損スル所

乙ABC

16 泣キ悲ミ

乙ABC 「泣キ悲テ」底大「泣キ悲」甲北実国野

17 心發シテ

甲北実国野ABC 「心ヲ發シテ」底大「心發テ」乙

卷十二第三十話

一七五 8 嗔恚不發女

乙ABC

8 出家ノ後ニハ

乙ABC

12 許也人

AB

17 其□□不發シテ

「其ノ□□不發ズシテ」大 諸本欠字。

一七六 1 他寶ヲ

★ 「他ノ財ヲ」乙ABC 「先ツ他ノ財ヲ」底甲実国野大「先ツ地ノ財ヲ」北

2 屋焼畢ヌ

乙ABC

7 忿キ返シ送り

乙ABC（野ABCの「忿」は「急」）

「底本破損のため不分明。B本は何によりてか「夜病イ」と朱補。」

卷十二第三十一話

一七六 阿陪ノ天皇ノ

16 在ル門

16 所ニ□□ル

17 持タル所ノ物

17 寫セリ

17 水□□床一足也

一七七 1 □□餘ヲ経フ

7 林ノ人

12 半ヲ経テ

12 山ニ入ル間ニ

16 是ヲ見テ

17 山ニ居ケル間

17 主死

17 身ヲ投タル也□

乙 A C

★ 「有ル門」 甲北実国乙 A B C 「有ル間」 底野大

諸

北乙 A B C

諸「書寫セリ」底大 底本破損のため見え難き故、諸本「写セリ」に作る。

甲北実国野乙 A C

乙 A C 「□□餘ヲ経ヲ」 B 「□□餘ヲ経ノ」 甲北実国野 「□□年餘ヲ経テ」 底大（破

損のため不明）

甲北実国野乙 A C

乙 A B C

★ 「山ニ入ル又聞クニ」 底甲北実国野大 「山ニ入ル間クニ」 乙 「山ニ入ル間ニ」 A C

「山ニ入ル」 B

★ 「此レヲ見テ」 乙 A B C 「菩薩此レヲ見テ」 底甲北実国野大

★ 「山ニ入行ヒケル間」 底大 「山ニ□□ヒケリ間」 甲北実国野乙 「山ニヒケリ間」

A C 「山ニ上ケリ間」 B

「生死」 大

乙 A C 「身ノ投ケリ也□」 野 「身ノ投フケリ也□」 甲北 「身ノ投ツケ也□」 実国 「身ヲ

投タル也ト」 B 「身ヲ投テケル也ト」 底大

「底本、破損多くして判読困難なる故、諸本に異文が多いところ。」

一七八	1	返□造リノ	甲北実国野乙AC 「返船造リノ」 B 「返リ□彼ノ船造リノ」底大（破損のため不明）
	1	投タル今縁ヲ	乙ABC
	1	船人等亦	実国野乙AC 「船人等」 B 「船□人等亦」甲北「船造□人等亦」底大（破損のため不明）
	4	見ルニ	乙ABC
	7	誦セル事	乙ABC
卷十二第三十二話			
一七八	12	葛下ノ郡ノ	底甲乙AB
	14	云	甲北実国野乙AC
	14	寺在リ寺ニ	★ 「寺有リ寺ニ」甲実国野乙ABC 「寺有寺ニ」北「寺有リ其ノ寺ニ」底大
	15	懐任シテ	底乙
	16	源信僧都也	乙ABC
一七九	1	年三ニ齊戒ヲ	諸大 「諸本かく作るが、かかる熟語は他に聞かぬ。「齊」は「齋」の通字。」
	2	小サシ	諸
	3	源信ニ	ABC
	4	分ニ	乙ABC
	5	所磨瑩キ也ト	諸
	8	正教ルニ	★ 「正教フルニ」乙AC 「正教ヲ教フルニ」底甲北実国野B大
	8	聡敏ニシテ	諸 「聡繁ニシテ」底大 「名義抄、繁をサカシとよむ。」

- 9 頭蜜ヲ 乙A
- 10 学生ノ思ヒ 乙ABC
- 12 名聞ヲ離テ 乙AC
- 12 籠居ス 野ABC
- 14 往生要集ト云ヲ作テ 諸「往生要集ト云フ作テ」底大
- 15 如此キ 乙ABC
- 一八〇 2 或人ノ夢ニハ B
- 3 是妙音菩薩ノ ★「此レ妙音菩薩ノ」乙ABC「此レハ妙音菩薩ノ」底甲北実国野大
- 5 学者 乙ABC
- 7 心ノ疑ノ所ヲ 諸
- 8 慶祐阿闍梨 諸大
- 10 御使也 乙ABC
- 17 紫雲簪テ 北実国野乙ABC(乙の簪は変)「紫雲□テ」底大「紫□雲簪テ」甲
- 卷十二第三十三話
- 一八一 6 □氏 底乙AC大「橘□氏」甲北「橘氏」実国野B
- 9 児ヲ見ルニ無シ C
- 10 落ニケリト 乙ABC
- 10 音拳テ 乙ABC(乙ABCは擧)
- 12 空ニ仰キ 乙ABC

- | | | |
|-----|----------|--------------------------------------|
| 15 | 鬘給タル | 「鬘結タル」諸大 |
| 一八二 | 2 詔シテ | 乙 |
| 3 | 此ノ児 | ★ 「此ノ児ヲ」甲北実国乙A C 「此児ヲ」B 「母ノ夢ニ此ノ児ヲ」底大 |
| 4 | 貴氣ナル聖人ノ | 底北実国野（北以下は字間をあけたり） |
| 5 | 父母ハ | 乙A C |
| 7 | 天台座主 | 乙A B C |
| 11 | 登ケルハ | 乙A C |
| 11 | 後生菩提ノ | 乙A B C |
| 14 | 座主免サル事無シ | 乙A B C（乙A B Cは無） |
| 14 | 思ヒ歎キ | 乙A B C |
| 17 | 学生ニテ | 乙A B C |
| 一八三 | 6 唱テ | 乙A B C |
| 6 | 強ヒトテ | 乙A |
| 6 | 築地ヲ築キ廻シテ | 乙B（乙Bは廻） |
| 7 | 其ニソ住ケル | 底乙A B C |
| 8 | 修セリト見ケリ | 甲実国野乙A B C 「修セリシ見ケリ」底大 |
| 9 | 御僧トセムト | 乙A B C |
| 12 | 十餘日ノ前ニ | 諸大 十余日も前にの意。 |
| 14 | 其理ヲ | 野乙A C |
| 16 | 義豆岐左須 | 甲乙A |

一八四 4 被搔起ヌ

乙 A
乙 A B C

5 有ラム

乙 A B

5 思へトモ

乙 A B C

5 怖ロシク

底乙 A B C

6 牙ニ

底甲北実国野

6 押壊ツ

乙 A B C

9 持来レト云へリ

諸

11 朧ヲ

乙 A C

11 二三度許レリ

★ 「二三度許乙デ、」底甲北実国大「二三度許シ、」野「二三度許レテ、」乙「二三度許シテ」 A B 「二三度許シテ」 C

諸

13 臨見シカハ

諸

16 合掌ヲ

乙 A

17 寂被思ヒ出事

★ 「寂被思出事」乙 A B C 「寂後ニ思ト出テム事」実国「寂後ニ思ヒ出テム事」甲

北野「寂後ニ思ヒ出ケル事」底大（破損のため不明）

17 可遂キ也

甲北実国野乙 A

17 碁ヲ打テ泥也

乙 A C

一八五 1 人ノ夢

甲北実国野乙

卷十二第三十四話

一八五 9 嬰

大 古本は異体。即ち「貝」を「目」に作る。

9 抱寝タルニ

甲北実国野乙 A C

11 不敏ト人ノ中ニ

★ 「不敏ズ人ノ中ニ」底甲北実国野大「不敏十人ノ中ニ」乙「不敏シテ人ノ中ニ」

A B C

15 居ルニ

★ 「居タル」 B 「居タルニ」□「甲」居タルニ居タルニ底北「居タルニ」実国野

乙 A C 大

15 焼ケル

甲実国野乙 A

16 食シテ

乙 A B C

17 初二ハ

乙 A B C

一八六 4 弟子等少□来テ

★ 「弟子等少□来」北「弟子少□来テ」甲実国野乙 A B C 「弟子等少ク出来テ」底

大

4 童長短ニテ

乙 A B

4 力強ケナルカ□髪ナル甲北実国野乙 A C

5 何コヨ无□

諸

6 四五人カ所

諸

6 道行ク事モ

乙 A

6 行カム様ニ即

乙 A C

8 大ナル

乙 A B C

10 死ス

A B C

- 11 不知シテ 底乙ABC (底のテは古体)
 12 不可出ナハ 乙AC
 14 待チ受テ 底
 17 煩ナルニ依テ 諸
- 一八七 1 事ヲ ★「事ヲバ」底「事ヲス」諸
- 7 不歸依ト 乙ABC 「不歸依スト」甲北実国野「来□不歸依ズト」底大 (破損のため不明)
 8 圓融院□皇位 乙ABC
 10 年来 乙ABC
- 11 是ニ依テト ★「此ニ依テト」C「此レニ依テト」乙AB「此レニ依テ□ト」底甲北実国野大
 乙ABC
- 11 可将来ト 乙ABC
- 12 聖人ノ可来キ馬 「□聖人ノ可乘キ馬」大 諸本欠字。
 乙ABC
 乙ABC
- 14 抱キ乘セム 乙ABC
- 16 火ノ光ニ 諸
- 16 當テ見レハ経ノ破 ★「當テ見レバ経ノ破ノ」底大「當テ、見給ノ破」乙「脱文」経ノ破」B
 乙ABC
- 一八八 3 行キ見レト AB
- 3 谷迫道ニ 乙ABC
 乙ABC
- 4 板敷ハ 乙ABC
- 5 是ヲ見テ 実国野ABC「是□ヲ見テ」甲北「□ヲ見テ」底乙大
 乙C
- 6 御ニテ 乙C

	8	不参ト思ヌ	★ 「不参ト思ストモ」 B 「不参ト思ス」乙 A C 「不参シト思ス□」甲北実国野「不参シト思□」云フトモ」底大（破損のため不明）
	8	泣ク許	乙 A 「泣々許」 B 「泣ク許□」甲北実国野「泣ク許ノ」底大
	9	氣色ヲ□云	甲北実国野乙 A B 「氣色ヲ云」 C 「氣色ヲ以□云□」底大（破損のため不明）
	10	然ステ可在キ	実国乙 A B C
	10	不出ト	乙 A B C
	11	入レハ□是ハ	「入レバ□此ハ」大 諸本欠字。
	11	令テ	北乙 A
	12	我カ君我レヲ	乙 A
	15	□是ヲ見テ	諸本欠字「□此レヲ見テ」大
	15	蒙スラメ	底甲乙
一八九	4	聖人	乙 A B C
4	4	参リ給ヘリ	乙 A B C
	4	山ノ法皇	乙 A B C
	8	地震在リ	乙 A B (乙 A B Cは有)
	10	□山ノ	諸
	11	消□ヲ持来	乙
	12	方ヲ闕テ	乙 A B
	13	忿キ	乙 A B C (野 A B Cの忿は急)
	15	様々ノ	乙 A B C

卷十二第三十五話

- | | | |
|-----|---------|---|
| 15 | 針ノ□タルヲ | 諸大 B本、「サビ歟」と朱補。 |
| 15 | 是ヲ見テ | ★「此レヲ見テ」乙AB「此ヲ見テ」C「源心此レヲ見ヌ」甲北「源心此レヲ見テ」底実国野大（底実国のテは古体） |
| 16 | 一ツ針ヲ | 諸「一ツ□針ヲ」底 空格「ノ」とあつたものか。 |
| 17 | 思忙 | 諸（Bの忙は変） |
| 17 | サハレ | 底甲北実国野乙 |
| 一九〇 | 生レタリケルヲ | 底B |
| 3 | □思ヘテ | 諸大 B本「イカミイ」と朱補。 |
| 4 | 云ヲ聞クニ | 乙AB |
| 4 | 問ヒ聞テケリ | 乙AB |
| 5 | 三月日ノ | 諸「三月□日ノ」底大 |
| 7 | 誦シテ | 乙ABC |
| 8 | 呼ヒタルナム | 乙 |
| 一九〇 | 山寺有ニ | 乙ABC |
| 14 | 永ク | 「永ガク」古本大 ガは「永」の捨てがな。甲・北・実三本は「ガノ」 |
| 16 | 愛宕護 | 野乙ABC |
| 17 | 入テ在ル時ニハ | 甲北実野乙AB（甲北実野乙ABは有） |
| 一九一 | 移リ住ム | 乙AB |

- | | | | |
|-----|----|-----------|--|
| | 6 | 悩ヒケレハ | 乙 A C |
| | 10 | 然ハ | ★ 「然レハ」乙 A B C 「然ラバ」底甲北実国野大 |
| | 12 | 有テ出来ル | ★ 「有テ出来タル」乙 A C 「有テ出来タルヲ」B (出は変) 「有テゾ出来タル」底甲北実国野大 |
| | 14 | 渡ラセ給ヘル | 乙 A B C |
| | 15 | 何事候ハムト | 諸 |
| | 16 | 糸頼シク貴シ | ★ 「糸憑シク貴シ」乙 A B C 「糸憑モシク貴シ」甲北実国野 「糸憑モシ貴シ」底大
「終止形による中止法の例。但し、かく作るは底本のみ。」 |
| | 16 | 中将殿 | 乙 A B C |
| | 16 | 頸聖人ノ牛ヲ人ニ給 | 「頸」諸 「頸ニ」底大
「頸」は「衣の頭」の意。これを理解する能わざりし為、次の「手ヲ入レ給」を、底本以外の諸本「牛ヲ人ニ給」(B本「手ヲ人ニ給」)に作る。」 |
| | 17 | 枕ヲマサセテ | A C |
| | 17 | 打テ | ★ 「打シテ」乙 A B C 「打出シテ」底甲北実国野大 |
| | 17 | 然ハカク | 諸大 「然ハカリ」 B |
| | 17 | 思□高クシテ | 諸 「思□音高クシテ」底大 (破損のため不明) |
| 一九二 | 1 | 目ノ涙 | 乙 A B C |
| | 1 | 病者ノ胸ニ | ★ 「病者ナル胸ニ」乙 A B C 「病者ノ温タル」ニ「底甲北実国野大 (大は胸) |
| | 1 | 氷ノ様ニテ | ★ 「氷ノヤウニテ」乙 A B C 「氷ヤカニテ」底甲北実国野大 |
| | 9 | 他ノ人云ク | 乙 A B C |

- 9 蔵人ヲ以テ 乙ABC 「蔵人□□ヲ以テ」底甲北実国野大
- 12 辞センスラムト ★ 「辞セムスラムト」野ABC 「辞バムズラムト」底甲北実国乙大
- 15 髪ノ乱テ 乙AC
- 17 無リ ★ 「无カリ」乙ABC 「无カヘリ」甲北実国「无カメリ」底野大
- 17 且ハ參テ 諸
- 一九三 一 參給トテムハ 乙「參給ハテムハ」野「參給トテトハ」北「參給ラムハ」甲実国ABC 「參給タラバ」底大
- 3 僧カト 甲北実国野乙AC
- 4 然許 諸
- 6 病ナムヲ 乙ABC
- 7 是ヲ聞テ ★ 「此ヲ聞テ」甲北実国野大「コレヲ聞テ」乙ABC 「世レヲ聞テ」底
- 9 飯一盛指入ノ 諸
- 10 飯ノ箸ヲ以テ 乙ABC
- 10 含メツ 乙AB
- 11 欲シ思ケレハ 乙ABC
- 11 残レルヲ 乙ABC
- 12 藥王一品ヲ 乙B
- 15 迹ルカ 諸
- 一九四 一 此聖人ヲ誹謗メ 「此ノ聖人ヲ誹謗シテ」諸（乙BCはノ欠）
- 2 病重ヲ受ニ 乙ABC

- | | | |
|----------|-----------|--|
| 3 | 療治セムト云ヘトモ | 諸 |
| 3 | 其験□然ハ | 諸本欠字「其ノ験□然レバ」大 底本破損のため不明。 |
| 5 | 勧メテ云ヘハ | 北実国野乙B |
| 5 | 邪心ニ | 乙AB |
| 6 | 請シテ | A |
| 7 | 投入レハ | 甲北実国野乙AB |
| 8 | 聊モ | 乙ABC |
| 卷十二第三十六話 | | |
| 一九五 | 1 音微妙ニシテ | 乙ABC |
| 2 | 輪ニ籠テ | 甲乙AC |
| 2 | 籠合 | 諸 |
| 3 | 器量シテ | 北乙ABC |
| 5 | 大明神等ノ□ | 諸大 底本破損のため不明。 |
| 5 | 聞□近來 | 諸(Cは空白なし)「聞ガ為ニ近來」底大 |
| 6 | 御坐ス也ト | 甲乙ABC「御坐ヌル也ト」底大「御坐スレ也ト」北実国野 |
| 6 | 告クルト見 | 諸「告グト見テ」底 底本虫損のためやや不明。 |
| 6 | 夢覚□ | 「夢覚テ□」底大 |
| 7 | 音拳ツ、 | 底本破損のため不明。諸本テをも欠く。
甲北実国野乙C(甲北実国野乙Cは擧) |

- 8 在ケリト ★ 「有ケリト」乙ABC 「有ケレハ」甲北実国野 「有ケレト」底大
- 9 立去ヌ C
- 10 邪氣煩テ 乙ABC
- 12 難堪ニ依テ B
- 14 此道命阿闍梨 C 底甲北実国野
- 17 聞テ C
- 一九六 2 其後ノ女人 C
- 3 後ノ事 乙ABC
- 4 房檐ノ方ニ 諸
- 5 泣ク一人ノ 乙AB
- 7 檐景 諸
- 7 阿□□ 乙AC 「阿闍梨□」甲北実国野 B 「阿闍梨□□」底大 (破損のため不明)
- 7 板敷下 乙ABC
- 8 経有□□有リ□□並ヒ ★ 「経□□有□□有リ□□並ヒ无シ」甲北実国野 A B
 (ABは経の下の空白なし) 「経有□□並ヒ无シ」乙 「経有□□有ヒ無」C 「経ハ割シ
 无シ」ク有□□有リ貴□方ハタラ並ビ无シ」底大 (破損のため不明)
- 9 事ヲ 乙ABC
- 12 左近大夫シテ 乙ABC (ACの太は太)
- 一九六 14 汁無リケレハ 底甲北実国野 (底甲北実国野は無がナになっている)
- 15 頭ヲ放テソ咲ケル 甲実国乙AB

15 過キケル

乙 A B C

16 生レタラムテムト

★ 「生レタラムテムト」底野大「生レタテムト」甲実国乙「生レタナムト」北「生レタルラムト」A B C

一九七一 心ニ経ヲ誦シテ

諸「□ニ経ヲ誦シテ」底大

「底本破損のため稍不分明。なるも、かく判ぜられる。諸本、すべて「心」に作るが、類表現にも前後の文脈にも合わない。」

2 来テ

乙 A B C

2 生時ニハ

B

2 寸倍セリ

甲実国乙 A C 「千倍セリ」北野「十倍セリ」底 B 大

3 造テ

乙 A B C

6 告ル也トソ

乙 A B C

7 人々

乙 A B C

卷十二第三十七話

一九七二 高階兼博ノ子也

★ 「高階兼時ノ子也」乙 A B C 「高階ノ兼時ノ子也」野「高階兼博子也」甲北実国
「高階ノ兼博ノ朝臣ノ子也」底大

12 法華経□受持テ

甲北実国野乙 A C

13 發サレハ

実国乙 A B C (実国乙 A B C は茲)

14 船井ノ郡□棚波

諸

- | | | | |
|------|------|---------|---------------------------------------|
| 1981 | 14 | 籠居 | 野乙AC「籠居」B「籠居□」甲北実国「籠居シ□」底大（破損のため不明） |
| 1 | 1 | 誦スル聞テ | 諸大「誦スルヲ聞テ」ABC |
| 2 | 1 | 寄異フ思テ | 乙A（乙Aは奇） |
| 2 | 2 | 天童下テ | 諸 |
| 2 | 2 | 讚ム也ケリト | 乙ABC |
| 4 | 4 | 懃ノ言ニ依テ | 底乙ABC |
| 5 | 5 | 仰ケ敬フ | 乙B |
| 6 | 6 | 久シク有 | ★「久ク有テ」ABC「久ク有ラ」乙「久ク有テハ」野「久ク有ラバ」底甲北実国 |
| 7 | 7 | 悪業ヲ不造シト | 大 |
| 9 | 9 | 死スル物也ト | 底乙AC |
| 10 | 10 | 食スト云ヘトモ | 底甲 |
| 10 | 10 | 不如 | 乙ABC |
| 13 | 13 | 信ヲ疑テ | 乙ABC |
| 15 | 15 | 云ク退テ | 乙AC |
| 15 | 15 | 冥道ニ | 乙AB「云ク退ク」C「□」云ク退テ」甲北実国野「駈リ此ヲ退テ」底大 |
| 15 | 15 | 行ク程ニ | 乙AC |
| 15 | 15 | 免ト見テ | 底野乙AB |
| 1993 | 1993 | 閻魔ノ御書也ト | 乙ABC |
| | | | 諸 |

卷十二第三十八話

一九九 山ニ登テ

諸

12 不得ト

乙 A B

14 愛宕山ニ

A B C

15 實ノ螺ヲ

乙 A B 「寶□螺ヲ」 甲「寶ノ螺ヲ」 北野 C 「寶ヲ螺ヲ」 実国 「寶ウ螺テ」 底大 U
 は、「宝」の字音の捨てがな。

17 面ニ

甲 実国野 乙 A B C 「面ルニ」 北 「而ルニ」 底大

17 宿リツ

乙 A B

二〇〇 1 云フ事

甲 北 実国野

2 悪魔ノ

乙 A B C

卷十二第三十九話

二〇〇 14 好延持経ト云フ

北 乙

15 三十部ヲ

★ 「卅部ヲ」 北 乙 A B C 「卅部ヲゾ」 底 甲 実国野 大

二〇一 2 守リ給フ也ト

★ 「守リ給也ト」 乙 A B 「守給也ト」 C 「守リ給フ故也ト」 底 甲 北 実国野

4 □阿闍梨

諸大

5 聳テケル

A B C

6 法花讀テ

乙

11 此ノ時ニ

乙 A

13 夢ノ如クニ

乙 A B C

卷十二第四十話

二〇一 薊ノ嶽

「薊ノ嶽」諸

17 出家ヨリ

B

二〇二 4 宮マムト

野乙(野乙は營)

5 讀キ

乙ABC

9 聖諦女也ト

「聖諦女也ト」ABC 底は破損のため不明

10 有ト云ヘトモ

乙ABC 底は破損のため不明

13 年来

乙ABC 底は破損のため不明

13 栄花ヲ開キ

底甲北美国野(底甲北美国野は榮)

17 聴テ

乙ABC

おわりに

『今昔物語』卷十二の本文の異同を見ると、鈴鹿本という原本に近い本が残っているせいか、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、野村本と一致する箇所は少ないという結果が得られた。また、これまでの巻では、内閣文庫本Bの表現が彦根城博物館本の表現と一致する箇所が多く、それは、空白などの形式と同じ傾向にあったが、卷十二の場合もそのことは同様である。ただし、卷十二第三話では、彦根城博物館本が「不所学ス」であるのに対し、内閣文庫本Bは、「不学ス」となっており、彦根城博物館本の方が「所」の一字が多い。このところ、古本系(甲美国野)、流布本系(乙ABC)で「不□所学ス」となっている部分であり、もともと古いと思われる鈴鹿本では、「不似所学ス」となっている部分である。鈴鹿本にはあった「似」の字が不明箇所として空けられ、その空白部分が詰められたのが彦根城博

物館本で、さらにそこから「所」が抜けたのが内閣文庫本Bということになる。同様のことは、巻十二第十話でもいえる。彦根城博物館本及び古本系（甲北美国野）、流布本系（乙AC）は「常□」の表記のところ、内閣文庫本Bには空白部分がない。このところ、鈴鹿本では、「常ニ参リツ、」とある。この場合も鈴鹿本にはあった「ニ参リツ、」が彦根城博物館本では不明箇所として空けられ、その空白部分が詰められたのが内閣文庫本Bということになる。巻十一の分析において述べたように¹⁰、彦根城博物館本は、内閣文庫本Bより前に成立した写本である可能性が高いと考えられる。

ただ、巻十二第十三話では、彦根城博物館本で「痛ミ給フ」とあるところ、内閣文庫本Bは、古本系（甲北美国）、流布本系（乙AC）と同じく、「叫ヒ給フ」とあり、両者の書写関係が一对一での直接書承と考えると矛盾が生じる。このところ、鈴鹿本は、「痛ミ叫ビ給フ」とあり、彦根城博物館本とその他の諸本との表現が融合した形となっている。ここで、興味深いのは、彦根城博物館本だけが鈴鹿本に表記される「痛ミ」の表現をとっているところである。以前に、彦根城博物館本は流布本にはない古態本系の表記を有する本であることを述べたが、ここでは、彦根城博物館本のみが最も古い鈴鹿本の表記の一部を残している。これについて、どう考えるかは、今後の課題としたい。一方、そう考えると、内閣文庫本Bは、彦根城博物館本（あるいは、その系統の本）を見ながら、その他の本も参照し、文脈的に読めないと判断したところについては校訂を施した本であるという位置付けができればどうか。校訂本文ということについては、次のことから立証できる。巻十二第十六話の「敢」の語は、彦根城博物館本、流布本系（乙A）、古本系（北美国）は鈴鹿本の「敢」の漢字を踏襲するが、野村本、内閣文庫本B、Cは、それぞれ文脈に沿うように「救」「取」「放」といった漢字に書き換えている。故に、内閣文庫本Bは、校訂を目指した本文であるといっていいていいであろう。また、ここからは、古本系でありながら、流布本系にも似た表記を有する野村本の表記のゆれの理由が実は、校訂本文を目指した書物であったことによることが見えてくる。ここにおいて、野村本、内閣文庫本B、Cが校訂本文を目指した本文であることが明らかとなった。

ひき続き、他の巻においても、その表記、固有名詞の引き写し方について検討を加えていき、彦根城博物館本の諸本における位置づけを明らかとしたい。

注

- (1) 中根「未紹介本『今昔物語』(彦根博物館所蔵)についての一考察」(『愛知県立大学説林』53号 二〇〇五年三月)
- (2) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻一の本文の位置づけ」(『愛知県立大学文学部論集』54号 二〇〇六年三月)
- (3) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻二の本文の位置づけ」(『愛知県立大学文学部論集』55号 二〇〇七年三月)
- (4) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻三の本文の位置づけ」(『愛知県立大学文学部論集』56号 二〇〇八年三月)
- (5) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻四の本文の位置づけ」(『愛知県立大学文学部論集』57号 二〇〇九年三月)
- (6) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻五の本文の位置づけ」(『愛知県立大学日本文化学部論集』1号 二〇一〇年三月)、中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻七の本文の位置づけ」(『愛知県立大学日本文化学部論集』3号 二〇一二年三月)、中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻九の本文の位置づけ」(『愛知県立大学日本文化学部論集』4号 二〇一三年三月)
- (7) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻六の本文の位置づけ」(『愛知県立大学日本文化学部論集』2号 二〇一一年三月)、中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻十の本文の位置づけ」(『愛知県立大学日本文化学部論集』5号 二〇一四年三月)
- (8) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻十一の本文の位置づけ」(『愛知県立大学日本文化学部論集』6号 二〇一五年三月)
- (9) (1)に同じ。
- (10) (8)に同じ。
- (11) (5)に同じ。
- (12) (4)に同じ。